絆

―つながりを紡ぐ山口へ―

代表者　　大森正義（経済Ｂ４年）
構成員　　佐畑敦史（経済Ｂ4 年）　草野誠（経済Ｂ4 年）　松本諒（経済Ｂ4 年）
青廣克典（人文Ｂ3 年）　水田舞華（経済Ｂ4 年）　千神健徳（経済Ｂ2 年）
大内晃汰（経済Ｂ2 年）　富永勇輝（経済Ｂ2 年）

結成からここまでのプロジェクトの大まかな概要を伝えていきたいと思う。

当初の予定では、農家から廃棄される野菜をもらい、学生に配布。そして、その対価として学生側から手紙を差し出し文通を行い、学生から農家への関心を深めること。農家と学生との交流を深め、農家体験や農家の方のやりがいや生きがいの形成を目的としていた。

そのために、まず絆メンバーで企画の段階に入った。そして、話し合った結果、大きなプロジェクトにできるだけしていきたいということで、概ね合意に至った。そこで、市役所との連携をまず図った。今回のプロジェクトの概要を伝え、地域交流センターや公民館への周知のお願いをし、もしできれば一緒に協力してほしいと伝えた。ところが、市役所の回答としては行政が絡むと学生が思うようにできない可能性があること。責任をもってこの一年間だけでなく数年という長いスパンで出来ないかもしれないのであるならば、協力は難しいと言われた。それと同時進行で、農家との協力、連携してくれる方をバイト先、友達の紹介などの人海戦術を用いて探した。その結果、株式会社カレーライスの岩本さんという新たな今回のプロジェクトの協力者に巡り合えた。そして今回のプロジェクトはその方の協力をもとにやっていくことにした。

図：チームで悩んでいる様子

その方から様々なアドバイスをいただいた結果、当初とは違う形になりそうだ。当初、農家から余りものを頂くところを、実際に僕たちが休耕地を貸していただき農家として活動する。そこに、学生たちを集め農業体験をしてもらう形にする。これが今回の新しくなったプロジェクトの概要だ。

だがそこにも今度は大きく問題が生まれた。おもプロとして絆メンバーが作った余った作物はどうするのかという問題が生まれた。作った作物を売買するにしても国の税金を使い絆メンバーが収益をあげることはどうなのかという問題が生まれ、寄付するにしても私を含めメンバーからの同意を得られない。これを解決する糸口を皆で話し合った。農地を貸してくださる農家から出された条件の一つにやるからには数年スパンでやってほしいこと。私たちは４年が多く、次の代も次の代もとなると、なかなか厳しい面が挙げられる。だったら、

完全にビジネスの路線で進めていき法人化した方が良いのではという声が下の学年から漏れた。私自身、お金を儲けたいという姿勢は好きではなかったが、皆と話し合った結果、岩本さんのアドバイスも加味した結果、おもプロを卒業して、ひとまず自分たちの好きにやってみるという結論に至った。

企画してから、4 カ月様々な経験をこのプロジェクトでさせて頂いた。自分の理論は机上の空論でしかなかったこと。メンバーと一丸になって何かをやっていくことは難しいこと。一人でやった方が確実に楽じゃね？？と思ったこともある。しかし、3 人いれば文殊の知恵とはよく言ったもので、色々な切り口からたくさんの提案、アドバイスが出た。結局メンバーがいないと自分一人では何もできなかったように思う。

今後は年々増えていく休耕地を活用して、農業をする新たな事に皆で取り組んでいきたいと思う。アドバイスをくださった辻先生をはじめ自主活動ルームの皆様、ここまで協力して頂いた人たちに感謝しかありません。本当にありがとうございました。